

経済マンスリー

[原油]

シェールオイル生産を牽引する産地パーミアン

原油価格（WTI 期近物）は 3 月初旬、米国原油在庫の大幅増加を受けて急落し、1 バレル＝47～48 ドル台と 3 ヶ月半ぶりの安値水準で推移した（第 1 図）。しかし、同月末には OPEC 協調減産延長への期待やリビアの油田封鎖に伴う供給混乱を背景に WTI は再上昇し、約 3 週間ぶりに 50 ドル台を回復、今月 7 日には、米軍によるシリア攻撃に伴う地政学リスクの高まりを受けて、同 52.24 ドルと約 1 ヶ月ぶりの高値をつけた。その後は OPEC 協調減産延長への期待が再び買い材料となったが、米国のシェールオイル増産観測が上値を抑制し、WTI は同 52 ドル近辺で推移している。

注目されている米国のシェールオイル生産量は今年 1 月から拡大に転じている。主要産地の生産動向をみると（第 2 図）、原油価格が低迷した 2014 年後半以降の局面では、最大の産地であるパーミアンだけが増加基調を保っており、イーグルフォードとバッケンで生産が大幅減少に転じたのとは対照的な姿となっている。原油価格の低迷にもかかわらずパーミアンで生産増加が続いているのは、生産コストが相対的に低いからである。パーミアンの一部地区では、シェールオイル生産コストは 1 バレル＝40 ドル以下と、他の産地より同 10～20 ドル低いとの見方がある。このような生産コストの低さは、地質に恵まれていることが大きく影響している。即ちパーミアンではシェール層が何層にも深く重なっていることから、他の産地と同じ広さのシェール層から、より多くの生産が可能である。生産効率の高さを背景に、今年に入り複数の大手石油会社がパーミアンの掘削用地や生産・開発会社を買収する動きが相次いでいる。

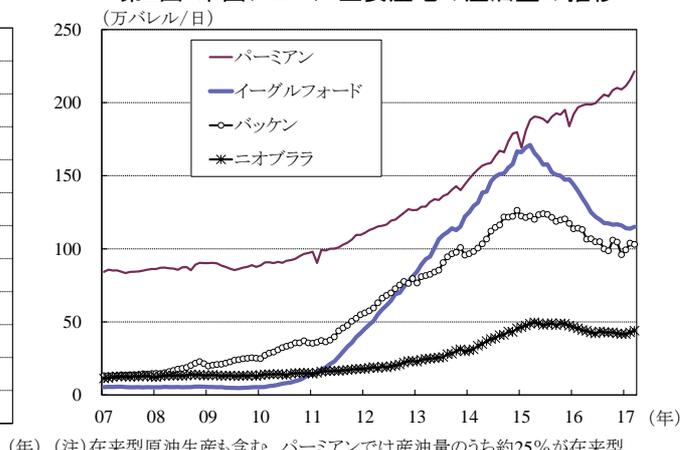
これまではパーミアンの生産増加が米国シェールオイル生産を下支えしてきたといえるが、減少が続いてきたイーグルフォードやバッケンの生産も原油価格の回復を背景に足元で下げ止まっている。市場価格をシグナルに経済合理的な増減産がなされることが米国シェールオイルの強みであり、原油価格の安定化に一定の役割を果たしていると考えられる。

第1図：原油価格（WTI期近物）の推移



（資料）Bloombergより三菱東京UFJ銀行経済調査室作成

第2図：米国シェール主要産地の産油量の推移



（注）在来型原油生産も含む。パーミアンでは産油量のうち約25%が在来型。
（資料）米国エネルギー情報局資料より三菱東京UFJ銀行経済調査室作成

照会先：三菱東京UFJ銀行 経済調査室 篠原 令子 reiko_shinohara@mufg.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の販売や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくご申しあげます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当室はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。また、当資料全文は、弊行ホームページでもご覧いただけます。